

横振り刺繍

刺繍作家・大澤紀代美さん

ミシンが織りなす芸術性

針が上下だけでなく横にも動くことで
立体的な表現ができる横振り刺繍。
そこには見る者の魂を揺さぶる何かがある。

私が芸術にしてみせよう

もう50年近く前のことだ。まだ30代だった大澤紀代美さんはある日、知り合いの画商からこう声をかけられた。

「美術展に出してみないか」

全国から出展者を募る日本でも有数の美術展に、作品を出してみないかというのだ。大澤さんの作品をその画商は高く評価していたのである。

だが、出展を打診すると、美術展の主催者からはこんな答えが返ってきた。

「お断りします」

機械（ミシン）を使うものは工業製品であり、芸術ではない、というのが理由であった。

これにカチンときた大澤さんは、心の中でこう独りごちた。

「だったら、私が芸術にしてみせようじゃないの」

大澤さんの負けじ魂に火がついた瞬間であった。

桐生市の裕福な家庭で生まれ育った大澤さんは、3歳の頃から鉛筆を

離さず何かしら絵を描いていた。

いつかは画家になる――。

それが少女の頃の大澤さんの夢だった。

転機が訪れたのは17歳のときだ。知り合いの工場に誘われ初めて横振り刺繍というのを知り、その製作現場を見た大澤さんは、直感的に思った。

これは私の仕事だ！

「ミシンの“針”が絵筆で、“糸”が絵の具。だったらこれで絵が描けるじゃないか。そう思ったんです。横振り刺繍に一目惚れしちゃったんですね」

一般のミシンは、針が上下に動くだけであるのに対し、横振り刺繍ミシンは針が上下だけでなく左右にも動く。縦だけでなく横にも動くから、横振りというわけである。

本当は“キリジャン”？

奈良時代から絹織物の産地として知られていた群馬県の桐生は、刺繍業も盛んであった。そして大正時代

にそこから生まれたのが横振り刺繍である。針が上下左右に動くため、糸を重ねるようにして縫っていくことができ、起伏に富んだ立体的な刺繍ができるのが横振り刺繍の大きな特徴だ。

その名が広く知られるようになったのは“スカジャン”がきっかけだったといわれる。戦後、横須賀に駐留した米軍の兵士が、背中に派手な刺繍を入れたジャケットを好んだことから生まれたスカジャンは、大澤さんによればもともと桐生が発祥の地だという。米軍兵士に頼まれた業者が製作を依頼したのが、桐生の刺繍工場だったからだ。

「だから本当はスカジャンではなくキリジャンなんです」

そう言って大澤さんは笑う。

かつて桐生には周辺の地域も含めて100軒ほどの刺繍工場が立ち並び、1,000人を超す刺繍職人が日々、ミシンを踏んでいた。だが現在、横振り刺繍に携わる職人は50人ほど。コンピュータ刺繍が登場してからは、ワッペンなどの大量生産品はコンピュ



おおさわ・きよみ 1940年、群馬県生まれ。17歳のとき横振り刺繍に出会い、以来60年以上にわたり刺繍制作に取り組む。有名デザイナーによるパリコレなどで衣装の刺繍を任されている。1994年、「現代の名工」受賞。1996年、黄綬褒章受章。2008年には桐生市内に「ししゅうギャラリー」を開設した。「雑学の大切さ」を指摘し、自らも映画鑑賞や読書、ドライブ（自分では運転しない）など幅広い趣味を楽しんでいる。



左上、毛の流れまで分かるほど描くデッサン。
左下、布を枠にはめる。右上、足踏み。右下、
糸を重ねて立体的に。枠には“KIYOMI”の文字
が。道具には名前を書いて責任を持つ。

一タ刺繍でつくられるようになったことが大きく影響している。

横振り刺繍専用のミシンは、扱い方が極めて難しい。一般的なミシンのように、布を固定する押さえがないし、縫った布の送り機能もない。しかも、両足でペダルを踏んで針の動く速度を調節しながら、ミシンの台の下についたレバーを右足の膝で押して、針を横に動かすことにより左右に幅を出す。すべて勘で横に動く幅もコントロールしなければならない。そのうえで片手で刺繍枠を押さえ、もう片方の手で布を動かしながら、両足も複雑に動かす、細かい柄を立体的に縫い上げていくのだから、考えただけでも頭が混乱する。技術的にある程度のレベルになるには、相当な時間を要する。もちろん技術的に上達しても、デザイン力や色彩感覚、センスが秀でていなければ、高く評価されるものはつ

くれない。だからコンピュータ刺繍が登場すると、多くの刺繍工場・職人がそちらにシフトしていった。

「いつまでも昔ながらの横振り刺繍をしていたら、食えなくなるぞ」大澤さんは当時、同業者からそう毒づかれたこともある。

「もう刺繍は無理です」

けれども大澤さんは、あくまでも横振り刺繍にこだわった。

「横振り刺繍をやり続けようという人はほとんどいなくて、その頃はもう風前の灯という感じでした。でも私はこれが好きで、桐生に残したい、途絶えさせてはいけないという思いが強かったんです」

こうして大澤さんは一層、横振り

刺繍の技量向上に努めていく。するとその作品の素晴らしさが徐々に知られていき、1975年には横振り刺繍の業界で初めて個展を開催。1987年にはアパレル業界からの要請でコレクションの刺繍部門担当に選ばれ、ファッションデザイナーの小西良幸（ドン小西）さんや山本寛斎さんのパリコレなどで衣装の刺繍を担当し、世界のファッション界にその名を知らしめることとなった。

「寛斎さんとはずいぶん喧嘩もしました。どの色の糸で縫うのがいいか、意見が分かれたりしてね。頭にきたので『だったら自分で縫ってみたいじゃない』と言ったこともありました。お互い、真剣勝負だったんですね。最後は信頼してくれて、刺繍については任せてくれるようになりました」

実はこれより前の1973年に大澤さんは原因不明の病魔に襲われ、2年



代表作の「幽玄」。
糸は絵の具と違って混ざることのない世界。
色の数だけ糸を使い、一針一針に魂を込めて、
すべてを表現していく。

半に及ぶ闘病生活の末、左目を失明している。

「もう刺繍は無理です」

医師からはきっぱりそう言われた。これにはさすがの大澤さんも落ち込んだという。だが、そこからまた立ち直るのがこの人らしいところだ。「遠近感がなくなるので最初のうちは戸惑いましたが、今では全然気になりません。階段を上り下りするときなどはちょっと怖いですが、刺繍をしているときにはハンデを感じませんよ」

そう言って笑う大澤さんによれば、横振り刺繍で最も重要なポイントは、糸の方向性だという。方向性に変化をつけることで陰影ができ、立体感が増すのだという。

糸は光で化ける

「横振り刺繍の表現で大事なことの

一つにグラデーションがあります。糸の色を変えることでグラデーションをつけるのは難しくありませんが、私は同じ色の糸だけ使っても方向性を変えることでグラデーションを表現することができますし、糸と糸の間にまた糸を縫い込むことでもグラデーションを表現できます。糸は、光で化けるんです」

刺繍をしているときが一番楽しいという大澤さんは、80歳になった今でも毎日のようにミシンを踏んでいる。これまで縫い上げた作品は数限りないが、その中で「一番の代表作は」と聞くと、迷わず「幽玄です」という答えが返ってきた。

自身を投影したというこの作品には、大澤さんにとって忘れられぬ思い出がある。

「ある百貨店で個展を開いたとき、この作品の前でずっと動かず見続けていた女性がいらっしゃいました。どうしたのかなと思って声を掛けたら、泣いていらしたんです。そして『自分は末期がんでもう治療を諦めていたのですが、これを見てもう一度頑張ってみようと思えるようになりました』とお話ししてくださいました」

某美術展の主催者は「機械（ミシン）を使うのは芸術ではない」と言った。しかし、機械を使うかどうかではなく、それがいかに人の魂を揺さぶるかで、その作品の芸術性は判断されるべきだろう。

だとすれば、大澤さんの作品の多くは、まぎれもなく芸術であろう。60年以上の歳月にわたり全身全霊を注ぎ込むことで、大澤さんはついに横振り刺繍を芸術へと昇華させたのである。